

春の踏切

石田 千

ひなたぼっこをしたくなると、踏切を見に行く。駅で路線図をながめ、どこで降りてみようか。気ままに乗りついでいく。

電車の窓から、商店街や鎮守の柱を見つめる。そうして駅の手まえに踏切があると、きょうはここに決めた。五十がらみのおぼちゃんひとり、少年探偵団の足どりになっている。

並木道、公園、お寺さんにお参りする。おみやげは、その町の食パン、あぶらげ、うぐいす餅。決まりは、ただひとつ。銭湯を見つけたら、すぐ入ること。風呂から出て、赤ちようちんを見つけて、ビール。

この一杯のために、明日も生きる。

一番星を見つげながら、踏切を渡る。寅縞の遮断桿が降りて、たれベルにもにぎやかに揺れる。踏切警報機のクロスマークのぼつてんは頼もしく、せん光灯が鮮やかに点滅する。列車進行方向指示器は、のぼりくだりともついで、そろそろラッシュがはじまる。

どうして機械の名まえを知っているかというと、好きが高じて信号機の会社を訪ね、踏切の仕組みを講義していただいたことがある。

よその町にまぎって、いい旅をしたと帰ってくるようになったのは、ひとり暮らしをはじめたからで、住んでいた北千住には、大踏切があった。JRと東武線が通り、朝夕はなかなかあか

ない。けれど、渡るさきは、荒川の土手までずつと、桜のトンネルが続く。ある晩、土手のほうの広い空から、まあるいお月さんがのぼった。

暗がりですぐ待たれかたが、いい月だなあとつぶやいた。開かずの踏切にいらしてはいたひと、自転車の前にもうしろにも子どもを乗せているお母さん、ほろ酔いのおじさん、みんなつられて、目をあげた。一期一会のみんな、ひよいと月に見ほれた。

旅さきでも、踏切を見つけるのがいちばんうれしい。

最新装置のりっぱなところもいいし、すれちがうひとが肩さきを譲りあうような、かわいらしいところもある。

